

◆世界言語学名著選集◆

第5巻

言語と人間〔哲学叢書〕

フンボルト著 岡田隆平訳
江苏工业学院图书馆
藏书章

ゆまに書房

言語と人間

昭和二十三年七月五日 印刷
昭和二十三年七月十五日 發行

定價 百貳拾圓

譯者 岡田隆平

發行者 東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
矢部良策

印刷者 東京都千代田區飯田町一ノ二三
中内佐光

發行所

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
(大阪市北區橋上町四五)

株式會社 創元社

電話茅場町(03)四〇〇八三四番
會員番號 A 一一九〇五一

凡 例

○「世界言語学名著選集」は、二十世紀の言語学史を辿る上で貴重と思われる国内・国外の著作を選び、海外で刊行されたものに関しては邦訳版を、国内で刊行されたものに関しては初版本を復刻集成したものである。

○構成は次の通りである。

第1巻 美学〔世界大思想全集46〕（ベネデット・クローチェ著 長谷川誠也・大槻憲二訳 一九三〇年刊・春秋社）

第2巻 言語学史（ヴィルヘルム・トムセン著 泉井久之助・高谷信一訳 一九三七年刊・弘文堂）

第3巻 言語の構造（泉井久之助著 一九三九年刊・弘文堂）

第4巻 言語民族学〔新学芸叢書〕（泉井久之助著 一九四七年刊・秋田屋）

第5巻 言語と人間〔哲学叢書〕（ヴィルヘルム・V・フンボルト著 岡田隆平訳 一九四八年刊・創元社）

第6巻 言語理論序説〔英語学ライブラリー41〕（ルイス・イエラムスレウ著 林栄一訳述 一九五九年刊・研究社）

第7巻 言語学の問題と方法（ヴァルター・フォン・ヴァルトブルク著 一九七三年刊・紀伊國屋書店）

第8巻 ことばの不思議（ウォルター・ボルツィヒ著 金子亨・諏訪功・野入逸彦訳 一九七三年・白水社）

○第2巻のみ115%に拡大して収録し、他の巻は原寸にて収録した。

○この度の刊行にあたり、再録を御許可下さった各機関・関係各位に深く謝意を表する。

目次

一般的序説……………	一
人間的言語構造の相違性……………	二七
一 序 論……………	二九
二 人間的發展過程の一般的考察……………	三一
三 文化・文明・教養……………	四三
四 個人と國民との協働……………	六〇
五 言語論への推移……………	七七
六 言語の形式……………	八一
七 言語一般の本性……………	九五
八 言語の構成的原理……………	一二八

目次

二

(一) 音聲形式……………二八

(二) 內的言語形式……………三六

(三) 兩形式の綜合……………四〇

九 言語の性格……………四三

二〇 結語……………一八

註解……………一九五

一
般
的
序
說

本書は Wilhelm von Humboldt の「ジャヴァ島に於けるカーヴィ語に就て」の序説として著名な Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts, (人間的言語構造の相違性とその人類の精神的發展に及ぼせる影響に就て) (1836. 遺稿) の翻譯である。テキストは H. Steinthal 編纂の Die sprachphilosophische Werke Wilhelms von Humboldt によつた。

最初は原書第九節の「言語一般の本性と性狀」(本譯書の七) までを譯すつもりであつたが、それだけでは、殊にフンボルトの言語に關する所論が餘りに不十分であると思はれたので、それかといつて、この序説全部を翻譯することは種々の事情が許さなかつたため、第九節以下は言語一般に關する殊に重要と思はれるテキストの第九節 d 「言語の音聲形式」、第十一節「內的言語形式」、第十二節「音聲と內的言語形式の結合」、第二十節「言語の性格」、第二十二節「これまでの研究過程への回顧」(本譯書の一〇) を添へることにした。それで本書八以下はテキストの結構を毀すことになつて、譯者として甚だ遺憾ではあるが、註解に於て幾分なりともその缺陷を補ふことに努力した。なほ抄略された部分は主として言語の細目に關係するものであつて、もともと譯

者の意圖が言語の本質およびその人間、民族、歴史などに對する關係に就てのフンボルトの見解を傳へたいといふ點にあることからすれば、この抄略は許されることと思ふ。従つて所謂言語學者から見たならば、この譯書は不十分であるかも知れないが、もしさういふフンボルトの見解を知らんとする人々に少しでも役立つならば、譯者の勞力はそれで報いられるであらう。

尙ほ註解は編纂者シュタインタールにならび、重要と思はれる箇所に加へたものであるが、その殆んど全部がフンボルト自身の言葉引用したもので、譯者の見解は努めて避けるやうにした。本譯書中ハ——Vは後に到つて挿入された箇所、「——」は後に削除された文、「——」は訂正された原の文を示し、「——」は原著者の註、「——」（小活字）は編纂者および譯者の註である。

序でながら永い間原書を拜借した速水敬二氏に對して、ここに厚く謝意を表したい。

○

本書はヴィルヘルム・フンボルトの言語研究の結果を綜合したものともいふべきであつて、彼の言語觀は以前の諸著作のうちに一層詳細に論じられてゐる。そこから重要な個所を引用して、

彼の言語觀一般に關する註解的な序説とすることにしよう（シュタインタールに據る）。

一八一二年に雜誌 *Deutsche Museum* の第二卷に現れた「バスク族の言語および民族に關する著作の豫告」は、本譯書の内容を萌芽として含んでゐる。

「バスク族の如き孤立せる民族を、現在の補助手段が許す限り詳細明確に記述しよう」と決心するにあつて、私は特に、世界史の或る最も必然的な取扱に就て立てられねばならぬ（世界史はたしかに種々の見地からして多くの取扱を許し、また要求するものであるから）と信じられる諸要求に着目したのである

人類は多くの民族、種族、人種に分れてゐる。個人は自己の意志と道德的自立性を意識する場合は常に獨立自由であるが、しかし全人類はまた植物、動物の類と同じやうに自然に屬してゐる。人間の發展にのみならずその原本的素質にも、人間の由來する種族、發生する土地、呼吸する空氣、人間を取り卷く環境、仰ぎ見る大空が影響を與へてゐる。或る種族は他の種族よりも自然に恵まれてをり、國民的發展の古代や近代の歴史が示してゐる最高なもの、最善なものは、努力、勤勉、教養の成果といふよりは、むしろ自然に恵まれた、精神や心情の諸力の緊張、傾向、

混合の產物である。いづれの時期を採つて、相並ぶ諸國民の不斷に前進する發展を考察するにしても、彼等は移動、分雜、融合、混合し、身體的に現實の沒落によるか、或は精神的に墮落によつて死滅し、新しく蘇生し、或は姿を變へて再び出現する。然るに或る側面から獲得された凡ての特徴は更に持續して、人間行爲の表現領域に於けるいはば獲得物となる。かくて益々異つた人間性の諸形式が多少の完全さを以て、相支持し増補しつゝ發生して來る。

かやうに人類を、元來主として物理的自然によつて生じた分雜狀態に於て考察する立場を採ることは、小集團の結合を旨し、全人類の道德的存在を益々崇高な目標に導かんとする大事件や道德的變革を追究することと同じく、世界史の義務である。このいはば二様の努力がいかにならぬかに協働せねばならぬかといふことは今は論すべき場所でない。ここに取扱はれる世界史の一つの職務は、民族や種族の様々な親近性、相互間に於ける種々の影響、彼等の向上と墮落、從つて休みなき職場から順次に新形態を生み出す自然そのものの活動を探索し、直接に人間と、人間のうちに出現する理念の偉大さに着目し、あたかも巨大な植物が種々の方向に寄生的に繁殖して地上にはびこり、天地が微笑めば嬉々として生ひ茂り、さもなければ低くはひのびて、その根は大地

に頼りながら、他方に天界の雨露と太陽から生氣と溫熱を與へられる如く、人類をさういふ植物と同様に考察し、かくして人類を直接自然に結合し、且つ自然を兩者の有機的生命を支配する理念に結びつけることである。これによつて必然的に各人の胸奥には思想が生じ、實を結んで遂に行爲となつて現れるであらう。

この職務に於て、種々の仕方で、殊に個々の種族に關する正確、詳細、誠實な記述によつて、世界史の準備工作がなされねばならぬのであるが、從來さういふ記述を殆んど全く缺いてゐた。けだし民族の差別は最も明瞭純粹に彼等の言語のうちに現れるが故に、かやうな記述に於ては、言語の研究が風習や歴史の研究と併行して行はれねばならぬ。……諸言語の親近性の程度を決定すべき確固たる原則が缺けてゐる。異民族相互の系統を證明する徵證に關しては殆んど意見が一致してゐないし、また個々の風習や、偶々或る言語の中から引抜かれた二三十の單語の斷片的比較に満足してゐる場合が非常に屢々ある。かかる無際限な廣範圍に於て、確實なる支點、比較點となる如き事實は甚だ僅少である。いかにして或る民族の言語が、同時にその文化敎養の標準、手段であるかといふことに關しては、われわれ自身なほ不確かな概念しか有してゐないので、

人類——人種、種族、民族に分れ、自然法則と不可抗的な條件とに隸屬されながら、同時に自由に自己を決定する大なる全體としての——に關する知識と評價を得んがための言語、歴史、民族の綜合的研究は、恐らく遠くしてせいぜいかな線しか見えないけれども、今や始めて眞に耕さるべき新原野であることが認められてゐない。」

更にフンボルトは言語に論及して次のやうに書いてゐる。

「言語に於ては一切が類比に基いてをり、言語の構造はその最微の部分に到るまで有機的構造であることが確固たる一原則と認められてよい。ただ言語形式が或る國民に於て障害をうけたり、或る民族が言語要素を他民族から借りて來るか、或は他國語の全部もしくは一部分を使用せざるを得ない場合には、この規則の例外が生ずる。かかる實例は恐らく現在知られてゐる凡ての言語に於て見られるし——われわれは原言語や原種族から、傳承の助けを以てはもはや踏み越えられぬ裂隙によつて隔てられてゐるから——、またアメリカ奥地の森林に於てさへ、他の言語を知る以前に行はれた純粹な分雜によつて發生し、且つ全く混合せずに残存してゐるといふやうな種族の例を發見することは困難である。然るに或る言語が他の要素を採り入れるか、或は他の言語と

混合する場合には、直ちに同化作用が始まつて、混合に於て劣つてゐる素材を順次に、能ふ限り他の素材に特殊なる類比的形式のうちに轉化しようとする努力が起り、かくしてこの混合から長短の類比的系列が生じて來るのであるが、しかし全然非有機的な聚積が残存することは滅多にならう。

然るにまた現實に存在する類比がその最も微細な分枝に到るまで、美事に追究し得られるとは限つてゐない。その痕跡は時代によつて消されてゐる。言語の諸要素は發生、消滅する點に於て生ける個體に似てゐるから、類比系列の中間要素は消滅して行く。言語の形成に助力して來て、今なほこれを助けてゐる人間でさへ、彼等が本能的に従ふ類比を必ずしも意識してゐる譯ではないし、また國民の意識は言語の個々の要素に分裂して、唯一の焦點に生々と融合されてゐない。言語の特有的本質といふものは、いかに十全なる分析を以てしても決して到達されない。言語の本質は全體を包む息吹に似てをり、餘りにも微妙で、個々の要素に注視すれば、その形式は見失はれてしまふ、——恰も山の霧が遠方から見ると形を具へてゐるが、霧中に入れば、忽ち形なく飛散するやうに。しかしわれわれはかかる言語の本質に接近して行く、種々の言語を精密に考察

し、かくして全人類の言語形成といふ一般的職務を深めて行くに従つて、益々われわれは各言語を——そしてこれのために分析が不可避免的な準備工作であるが——或る國民的性格形式の個性的表現として認識すべく努力するのである。この道を正しく踏んで行くならば、その間に實は單なる言語研究の限界をさへ踏み越えることになる。といふのは言語は凡ゆる場合に媒介者であるからである。すなはち言語は第一に無限性と有限性との間に於ける、次には個人と他の個人との間に於ける媒介者であり、且つ言語は同時に同一作用によつて結合を可能にすると共に、結合から發生するものである。言語の全本質は決して個人には存せず、むしろ必ず同時に他人からして察知され、或は豫感されねばならぬ。しかしまた言語はこの兩者から説明されず、却つて（眞に媒介が生ずる凡ての場合にさうである如く）言語は或る獨自なもの、不可解なものであつて、ただわれわれにはあくまで分離されてゐるとしか考へられぬものの結合の理念としてのみ與へられ、且つこのやうな理念を包藏するものである。言語の考察が架空的にならぬためには、言語に於ける物體的構成要素の全く無味乾燥な、しかも機械的な分析から始めねばならぬことはいふまでもないが、その考察はかやうにして人間性の究極の深所にまで導いて行く。そこで例へば或る人間

の名前がその人格から分離される如く、言語がその表示するものから分離され、また言語が取り極められた符號の如く反省と協定の所産であつたり。或は一般に人間（この概念が經驗的に解される意味に於て）もしくは個人の製作物でさへあるといふ如き觀念から全く解放されねばならぬ。言語は眞に不可解な謎として一國民の口から迸り出で、また毎日われわれの間に繰り返され無關心に看過されてはゐるが、同じやうに驚嘆すべき謎として、子供達の廻らぬ舌からも流れ出て来る。それで言語は、人間が元來、孤立的なる個性を所有せず、我と汝とは單に相求め合ふのみでなく、もしこの兩者の分岐點にまで廻り得るならば、兩者は眞に同一なる概念であり、そしてこの意味に於て、無力で頼りなく弱々しい個人から人類の原始的種族に到るまで個性を具へた諸集團が存在してゐるといふこと——さもないければ凡ての理解は永遠に不可能であらうから——の最も明瞭なる痕跡であり、最も確實なる保證である。」

「アメリカ諸言語の比較的考察」に於ては次の三點が區別されてゐる。「(一)言語の構造、(二)言語の系統と親近性、(三)言語がその國民の内外の狀態に對して有する關係、すなはち言語のか